

その時、編集者は 東日本大震災

■新編集講座 ウェブ版 第95号 2018/3/1

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

2011年3月11日に発生した東日本大震災から間もなく7年になります。当時、私は大阪本社編集制作センター室長、つまり紙面編集の責任者でした。限られた時間の中、殺到する記事や写真を基に紙面を作り上げていくには、現場を所管する東京本社をはじめ、広告、工程、輸送など各部門との連携が不可欠です。あの日の動きを振り返りました。

■ 裏方の司令塔

以前お伝えしたように（新編集講座ウェブ版47号「東日本が震えた日」）、地震発生の午後2時46分、私は大阪本社で会議に出ていました。大阪も激しく揺れ、私は編集局に駆けつけたのでした。

テレビの速報は、震源地が東北沖であることを告げています。正直言って、この時点で巨大津波発生と深刻な被害＝写真①②参照、ましてや福島第1原発の炉心溶融まで予測できたわけではありませんが、揺れの激しさから、被害の大きさは想像できました。

こんな時、編集制作センターが考えるべきことは、①号外の発行②朝刊の紙面編成（記事の増ページや広告削減）③特別紙面を作る要員確保④締め切り時間変更の必要性確認⑤東京をはじめとする他本社との連絡調整——と、多方面にわたります。

取材部門を仕切る社会部長や写真部長らが「表の司令塔」なら、編集制作センター室長は「裏方の司令塔」といった役回り。広告スペースを記事に振り替えるなら広告局のだれに相談すれば話が早い、締め切り時間を変える時は輸送グループのだれに連絡すればいいか——といったことを把握しておく必要があります。

■ 号外会議を招集

東北への応援や関西での取材準備に忙殺される出稿部門を横目に、私は「号外会議」を招集しました。発行時間、ページ数、部数、配布要員確保、配布地への輸送方法などを決める会議です。編集制作センターはもとより、取材部門、広告局、販売局、工程センター、系列の印刷会社などから担当者が集まりました。

こんな時は会議前、発生場所を所管する東京の室長（大阪と違い「情報編成総センター」と呼ぶ）に「記事はいつ出そうか」「写真はどうか」など聞いておきたいところです。でも大阪以上に職場が混乱しているのは確実。「決まったら向こうから連絡が来るはず」と割り切り、こちらからの問い合わせはひかえました。

私は「紙面出力は原稿到着30分後。詳細未定」と宣言し、他の事項を決めていきました。出席者に「相談」しては決まらないので、自分の案を「通知」するのみ。責任重大です。

大阪で作った号外は、見出しが「宮城北部」になっています＝右図③。まだ東日本各地への被害の広がりをつかみ切れていなかったためですが、その代わり在阪全国紙で一番早く発行できました。



(上) ①押し寄せる津波にのみ込まれる住宅

(下) ②大津波で流された多くの家屋

＝ともに宮城県名取市で2011年3月11日午後
本社へから



(左) ③大阪本社で発行した号外

■ 被災地のただなかで

おひぎ元の東京本社では、地震発生直後の午後3時から取材打ち合わせが開かれました。「阪神大震災（1995年）よりでかい揺れ」（経験者談）の直撃を受けただけに、10人ほどが座れる円卓の周囲には、各部から記者や編集者が詰めかけ、超満員となりました＝写真④。

後で聞くと、「打ち合わせ中、ビル会社の係員がヘルメット姿で点検に来て不安になった」「本社ビルから人が避難している＝写真⑤＝と聞き、自分も逃げた方がいいか迷った」とのこと。阪神大震災の時の大阪本社と同じく、自らも被災者だったのです。

この打ち合わせと並行して、情報編成総センターは大車輪の動きを始めました。中村詔史室長（当時）から後日もらったメモによると、記事・画像の送受信システムや東日本の印刷工場の被害を確認する設備系、当日朝刊の臨時面・休載面を決める紙面編成系、締め切り時間や輸送への対応を考える工程系、実際に号外や朝刊を編集する担当者を確保する制作系など、仕事は山のようにありました。

■ 役立った「顔の見える関係」

東京本社の動きを追いかけながら、私は大阪本社の紙面制作に向けて、紙面会議や臨時工程で部局間の調整を担いました。

ここで役立ったのが、東京と大阪の「顔の見える関係」でした。私自身、前任は東京の編集部長（室長補佐役）だったし、東京の中村室長も大阪勤務の経験があります。部長、デスク、部員にも両本社の経験者が多数いました。互いに相手の事情や動きが分かるので、問い合わせと応答がスムーズに運んだのだと思います。

たとえば連絡は、ファクスを励行しました。電話だと出られない時があるし、聞き間違えたり、忘れたりする恐れがあるからです。メールと違い、印字されて届くのも、忙しい時は便利でした。

夜に入り、朝刊＝右図⑥＝作業が本格的に動き出してから、見出しや写真の扱いなどの実務は部長やデスクに任せ、私は裏方作業を担当。阪神大震災の時、部員として紙面制作に専念したのとは一変しました。同じ編集職場でも、立場により役割が異なるのです。

■ 東京本社に次々と派遣

地震当日、東京は鉄道が止まりました＝写真⑦。出勤不能になった夜勤者や、仕事が終わっても帰宅できない社員が大勢いました。

震災報道も、「地震」「津波」「原発」に加え、首都圏での「計画停電」という要素が加わりました。連日の特別面制作や大幅な締め切り時間繰り上げで、東京の編集職場は疲弊しています。

私は、大阪の編集者の長期東京応援を申し出ました。関西のニュースを盛り込むため大阪で独自制作している2面や経済面を、東京と共通紙面にすることで要員を浮かし、応援に回すのです。紙面は大震災中心なので、読者にご迷惑をかける恐れもありません。

東京に向かう編集者に対し私は、大ニュースの現場で仕事をする緊張感を味わうとともに、停電で薄暗い東京の町＝写真⑧＝を歩いたり、休日にボランティアで行ったりして、自分の目で震災を体験してきてほしいと伝えました。阪神の時と同様、被災者と同じ目線で生活することでこそ、報道の意味を考えられるからです。



（上）④地震直後の東京本社編集局打ち合わせ
（下）⑤本社ビルから避難した人たち
＝ともに東京都千代田区で2011年3月11日午後



（左）⑥大阪本社で発行した朝刊1面



（上）⑦駅間でストップし避難するJR乗客
＝東京都立川市で2011年3月11日午後
（下）⑧ネオンの消えた駅前。手前左はハチ公像。
＝東京都渋谷区で同3月14日夜

